

自然科学的唯物論者の物質観

＜ビュヒナー・モレスコットを中心に＞

渡 辺 雅 男

1. 問題の提起

K・フォークト（1871～95）、J・モレスコット（1822～93）、L・ビュヒナー（1824～99）、等の自然科学的唯物論は従来「俗流唯物論」なる蔑称のもとに一括され、かならずしもその理論的意義が評価されてはこなかった。

もちろん、たとえば「19世紀自然科学研究所の通俗化と、哲学的唯物論思想の折衷的・通俗的な改鑄とによって啓蒙的意図を遂行しようとする試みが、自己の信念を実践的で政治的な行動へ移すことと結びついていた⁽¹⁾」ビュヒナーの場合、その社会活動は「党人⁽²⁾」としての一定の意義を有するものと認められてきた。だが、その世界観としての自然科学的唯物論思想は通例、「墮落した、浅薄な、卑俗な唯物論⁽³⁾」として、あるいはまた「ドイツ哲学の論理的墮落（つまり、主体と客体、思惟と存在の統一にかんする先決問題要求の虚偽⁽⁴⁾）」として、いずれも総括され、モレスコットとともに久しく「忘れられてきた⁽⁵⁾」のであった。

しかし、エンゲルスの「自然弁証法」研究に先だち⁽⁶⁾マルクスがその「経済学批判体系」（特に労働過程論）の構築にあたったとき、もし「彼がある種のモチーフをこうした唯物論に負っていることを排除することを要しない⁽⁷⁾」とするなら、ビュヒナー等の思想がもつ一定の理論的意義もまた、検討に値するものといえよう。

そもそも労働過程における物質的過程を第1に自然物質の運動過程として、第2にそれを媒介する労働の過程として明らかにするためには、なによりマルクスがその労働過程論の前提としていた物質の概念——特に「資料変換」概

念——を示すことが必要である。そのために自然科学的唯物論者の議論は有益な手がかりを与えていると思われる。

もちろん、前述のような「モチーフ」をシュミットのように「質料変換」に求めるにしろ、さらに進んでわれわれのように質料と力という方法的視座⁽⁸⁾として求めるにしろ、「歴史的過程を排除する抽象的・自然科学的な唯物論の欠陥⁽⁹⁾」も確認されていなければならない。『個別的問題における欠陥⁽¹⁰⁾』もさることながら、方法論の点からいえば、それはなによりも「質料変換」にたいする労働（ないしは労働力）の意義を人間の主体的な・自然にたいする・実践と解釈せず、それを活力（lebendige Kraft）一般に解消してしまう点にあると思われる。つまり、問題点はマルクスのように人間と自然との質料変換の過程を労働過程と把握せず、彼らがそれを単なる自然過程に解消してしまった点にある。したがって、シュミットが自然にたいする人間の第1の実践として労働の意義を強調することは、マルクスの思想（完成された自然＝人間主義）において自然主義にたいする人間主義の意義を強調することに等しい。これにたいし、自然科学的唯物論の限界は自然主義への人間主義の解消にあり、自然史への人類史の解消にあるといえよう。

以上の諸点を確認しつつ、自然科学的唯物論者⁽¹¹⁾の物質観を概観してゆきたい。

- (1) Dreisbach-Olsen, Jutta, Ludwig Büchner : Zur soziologischen Analyse naturwissenschaftlich-materialistischen Denkes im 19 Jahrhundert, Marburg, 1969, S. 6.
- (2) 1867年5月1日付ビュヒナー宛マルクス書簡
- (3) ソビエト科学アカデミー『世界哲学史』第5章, 邦訳343頁
- (4) Lange, F.A., Geschichte des Materialismus, Leipzig, 1908, Bd. 2, s. 98.
- (5) Schmidt, A., Der Begriff der Natur in der Lehre von Marx, Frankfurt a. M., 1971, s. 86.
- (6) 1864年7月4日付エンゲルス宛マルクス書簡を参照
- (7) Schmidt, A., op. cit. s. 85~6.
- (8) 「質料変換」が質料の一般的運動と理解される（宇佐美正一郎「生物学と経済学——方法論・『物質代謝』論——」『経済』, 1975年5月号, 257頁）とするな

ら、質料交換は質料と力の循環運動のなかに位置づけられるべきである。

- (9) K・マルクス、『資本論』、第1巻、第13章、注89。
 (10) 1858年3月5日付エンゲルス宛マルクス書簡で明らかにされたように、「機械の再生産の問題にあたって想起されるモレスコット一派は……骨格の再生産期間にはわずかしか顧慮を払わず、……人体の総回転期間の平均で満足している」。
 (11) ビュヒナー、モレスコットをカバニス、フォークトから区別した理由については本論の第6節を参照

2. 物 質

(1) 物質の2属性——質料と力——

ビュナーは第1の基本命題をつぎのように述べる。「質料をもたない力はない——力をもたない質料はない。一方それ自体がありえず、あるいは考えられないのは、他方それ自体がそうであるのと同じである。切り離してしまえば、両者は空虚な抽象ないし概念であって、ただ同一のもの（その固有の本性からみれば、われわれに未知な）本質の2つの側面ないし2つの現象様式を説明するためにのみ用いられるのである。力と質料は、それゆえ、根底においては同一のものであって、ただ相異なる視点からながめたものにすぎないのである。」(L. Büchner, *Kraft und Stoff*, Leipzig, 1855, 22.^e Aufl. 1904.——以下Bと略記——s. 3.)

ビュナーにとって、この第1命題の主張が『生命力』という特別な力を有機体に認める者（生氣論者）への反論をその動機としていたように、モレスコットにとっても、このことは同じ動機で主張されていた。「力をもたない質料はない。だが、質料をもたない力もない。基本質料（元素）の属性は不変である。したがって、生命力など問題となりえない。リービッチが『非有機的力』というのも、なんのこともよくわからない。」(Jac. Moleschott, *Der Kreislauf des Lebens*, Mainz, 1851, 4. Aufl. 1863.——以下Mと略記——s. 394.)

さらに、そもそも「この力は質料の属性いがいのなにもものでもない」(M : s. 346.) のであり、「力は質料と不可分で質料に永遠に内在する属性である」(M : s. 348.) のだから、「もし力が質料と不可分であり、質料に永遠に内在する属性であるとするなら、質料とともに力も変化しなければならない」(M ;

s. 350.) といえよう。

(2) 物質の不滅性——質料の不滅性と力の不滅性——

「われわれが日々眼前にみている諸物の不断の変化および変革，ならびに有機的にしろ非有機的にしろ形態と構成の生成と死滅は，……同一の基本質料（元素）……の永続不断の循環（Kreislauf）いがいのなにものでもないのである」（B；s. 15～6.）からビュヒナーは第2の基本命題：「質料それ自体は不滅であり，消失することがない；宇宙のどんな微小な塵も消滅せず，なにものもそれに付加されない」——これを教えた「化学の偉大な功績」を讃える。

こうした質料の循環（Kreislauf des Stoffs）は質料の不変性（不滅性）を自らの永遠性のなかで論証するものである。モレスコットもいうように，「質料の不変性，その保存量およびその属性の不変性，そして元素の対立的な親和力，つまり元素が相互に結合しようとする，対立によって条件づけられた傾向，これらは循環の永遠性の根拠である」（M；s. 44）

他方，「力を計ったり計算したりするのは質料を計量するよりもはるかに困難であるから，質料循環から類推され，それに照応する力の循環（Kreislauf der Kräfte）は半世紀以上にわたって秘められてきた」（B；s. 23.）が，F・モール，R・メイヤー，ジュール，等の研究により，力の不滅性にかんするつぎの基本命題が確立した。「質料と結合した力も質料と同じく創造不可能で消滅不可能であり，消失するものでなく，不滅である。」（B；s. 22.）

「召喚された力はただ，さまざまな形態をとったにすぎず，その力のそれぞれの総量は等価でなければならない」（B；s. 30.）という『力（エネルギー）の保存』法則を確認しつつ，ビュヒナーはつぎのように述べる。「こうして新たに発見された自然の真理の帰結は，質料の不滅から導びかれた帰結と同じものである；そして，両者はともに，永遠のむかしから永遠の未来へわたって世界で現象とよばれるものの総体をかたちづくる。」（B；s. 30.）

ところで，質料の不滅性が質料循環の永遠性のなかではじめて意味をもったように，力の不滅性もまた力の循環の永遠性のなかではじめて意味をもちうる。「『質料の循環』にたいして『力の循環』は必然的な相関概念として，ある

いは必然的な相互補完として現われ、つぎのことをわれわれに教えている。つまり、なにもものも生起せず、なにもものも消滅しないことを、そして自然の神秘は自らを通じ自らに帰ってゆく永遠の環にあること、そうした環にあっては、原因と結果は結びついて始めもなければ終りもないことを、不滅でありうるものは、ただ永遠に存在したもののみである。そして、不滅であるものが創造されたり、生起したりしていた筈はないのである！」(B ; s. 30.)

(3) 物質の無限性——質料の無限性と力の無限性——

現存の物質の環は「星辰空間の無限性」と「原子論ないし分子構造の無限性」(B ; s. 42.) とのあいだにあって、開かれた体系をもっている。

「だから、われわれが質料にとってその極小限をみだしえないとするなら、またその極大限にも到達しえないのである。われわれは無限に両方向——極大と極小——へ向って、それを解明しつづけるのである。」(B ; S. 47.)

質料のこうした無限性は力の無限性を伴うものであるから、つぎのようにいう。「われわれを明白にとりまいている世界は同一質料から構成され、同じ諸力によって運動し、同一不変の自然法則によって支配されている無限の総体である。」(B ; S. 106.)

3. 物質と運動

(1) 物質の運動——運動の物質性・不滅性・無限性——

ピュヒナーはいう。「運動しない物質が存在しないのは、力をもたない質料が存在しないのと同様であり、物質なき運動は質料なき力と同じく、存在しない。」(B ; S. 65)

モレスコットも運動を質料の一般的メルクマールとして理解する。「2つの質料が互いに十分接近させられているところならどこでも、それらは互いに作用をおよぼしあう。この作用は運動現象として知られている。質料が適当な状態のもとで自己を運動させ、他の質料も運動させるということは、質料の最も普遍的なメルクマールのひとつである。」(M ; S. 343.)

だが彼はさらに進んで、質料の運動を力の発現によるものにとらえる。「力

がその作用、それがひきおこす運動諸現象によって計測されるということは、たんなる仮定ではない。そうした作用いがいにわれわれは力についてなにも知ってはいないのだから。」(M ; S. 345.) というのも、そもそも「質料の運動を可能にするその属性をまさに力とわれわれはよぶのである。」(M ; S. 346.)

ビュヒナーも把握する。「運動が力からはずれておこることはありえない。というのも、運動は力の本質そのものであり、それゆえ、生れでるものではなく、永遠で至るところに在るものなのである。」(B ; S. 65.) だから、彼はエンゲルスの「運動は物質の定在様式である」(『反デューリング論』) という見解に共鳴する (B ; S. 65~6.)。

運動の本質を上述のようにとらえれば、力の不減ないし保存という命題から、「どんな種類の運動も新たに生まれることも消滅することもありえず、またそれゆえ、運動は本源的な状態ないし、いわば物質の精髓ともみなされねばならないということ」(B ; S. 71.) が明らかになる。

つまり、「運動は、力ないし質料と同じく、破壊されえないし、不滅である。それはただ、別の形態ないし現象様式をとるにすぎず、その場合、新たな形態とそれが生じたところの形態とは等しい」(B ; S. 71.)。

ところで、物質がミクロ的にもマクロ的にも、その系列を閉じていないように、物質の運動も宇宙のいたるところで認められ、汲みつくされえない。「運動は宇宙空間のいたるところ小規模でも大規模でも存在する。」(B ; S. 65.) このようにビュヒナーが運動の無限性を認めている一方、モレスコットにとっても、運動を力の発現ととらえる立場から、また力は質料の無限の属性であるとする立場からしても、運動がもつ無限性は自明の事実であった。

(2) 運動と静止

運動の物質性を確認する立場から静止状態を説明するために、ビュヒナーは運動が静止をそれ自身の契機として内包することを明らかにする。「絶対的静止というのは存在しない。それは、天文学者W・メイヤーの指摘するように、うるわしき夢であり、世界が知ることのない希望的幻想であり、自然界にその例をみない。」(B ; S. 65.) たとえば、支えて静止を保っている場合、「支えて

取り除けば、静止状態にある力は、その瞬間、再び活動状態にある力ないし動作に再転化されうる」(B ; S. 66.) のだから、「すべての静止、すべての平衡は、たんに相対的にすぎず、ただあれこれの一定の運動形態にかんしてのみ意味をもつにすぎない」(同上)。

「したがって、静止は運動を欠いた状態ではなく、2つの運動のあいだの拮抗にすぎない。」(B ; S. 71.)

(3) 運動形態

「宇宙空間における運動、個々の天体上での微小塊の機械的運動、熱ないし電流ないし磁気としての分子振動、化学的な分解と結合、有機的な生命——世界中のどの個別質料原子も、任意の瞬間に、こうした運動諸形態のうちのどれかひとつ、またはそのうちのいくつかの状態にある」(B ; S. 66.) のだから、運動には質料の位置変換(力学的運動)のみならず、多様な形態が認められるのであり、それを「変化一般」と考えることも可能である。

こうした多様な運動諸形態の認識を背景にデュヒナーは重力および熱を分子内運動と把握し、ダイヤモンドとそれを構成する原子・分子の運動について考察したあと、つぎのように述べる。「分子内運動および熱運動を度外視しても、どんな固形物でさえ、持続的運動状態にあるのであって、ずっと緩慢であり人目につかぬほどのものだとはいえ、その構成要素およびその形態はたびたび変化、あるいは転換するのである。」(B ; S. 69.) たとえば鉍物：「堅固な鉍物さえ、たえざる内的な変化ないし変形をとげつつあるのであって——それは、あるときは化学的な方向にであり、あるときは物理的な方向にである。」(B ; S. 69~70.) こうした運動は質料変換(Stoffwechsel)とよばれる現象を説明する。だから上述の文章に続け、デュヒナーはこの「化学的な方向」であれ「物理的な方向」であれ「たえざる内的な変化ないし変形」を「質料変換」と把握する。「有機的自然におけると同様、非有機的自然においても、間断なき質料変換がおこなわれており、それは鉍泉の近辺で顕著に認められる。」(B ; S. 70.) もちろん、こうした質料変換が有機的自然の運動をも総括するカテゴリーであることは自明である。「もっとも活発に、あるいはもっともエネルギー

ッシュにこうした質料変換が起きているのは、もちろん有機的世界でのことであるし、またそれ固有の本質は、たしかにこうした質料変換にもとづいているのではある。」(同上)

4. 物質と形態

形態が物質の不可分の属性であることをビュヒナーはつぎのように主張している。「力ないし運動の概念が物質の概念と切り離しえないように、同じことが形態の概念についてもいえる。形態をもたない物質など、あたかも形態がかたちづくられるものなしに形態というものが論理的に考えられず、経験的にも自然界に存在しないように、不合理なものである。」(B ; S. 75.)

モレスコットにとっても：「化合形態および力は質料の相互不可分なメルクマルであって、そのうちのどれひとつをとってみても、残りのひとつを必然的に条件づけている。」(M ; S. 362.)

形態が物質と不可分であるのなら、物質の運動のなかで、その形態は変化する。「力が質料と不可分のものであり、質料に永遠に内在する属性であるのなら、質料とともに力も変化しなければならない。こうしてわれわれは、少なからず重要な新しい普遍的命題：化合、形態および力はただ同時的ののみ変化しうる、をえる。」(M ; S. 350~1.) また逆に、「力は質料の一属性であるという命題にたいし、質料・形態・力のあいだの一致は間接証明を与えていると同時に、検証をも可能にしている」(M ; S. 351.)。

「もちろん、形態は、あたかもミネルバがジュピターの頭脳から発生するようには、物質から発生することはない。形態は、われわれがいま眼前にながめる完成形態にあってはじめて、長く困難で何百万年という歳月を要する発展の成果となるのである。」(B ; S. 76.) 自然がその形態を造りだす活動は、「自然固有の無計画的活動」であって、「なんらかの前もって考えられた定式か、前もって決定された形式的秩序」(同上)にもとづくものではない。

「こうしたすべてのことが明らかにしているように、形態は確定したもの、かつて在った本源的なものではなく、漸次的な変化によって発生するものであ

り、本質的なものというより、なにか外的なものであり、それなしには一般に物質的存在が考えられないものであるような諸状況を通じてもたらされるものである。」(B ; S. 78.)

5. 物質と空間・時間

「力は空間と時間における運動を通じて発現するにすぎない」(M ; S. 345.)と述べるモレスコットは、他方つぎのように述べる。「質料はつねに重力をもち、空間を充たし運動することができる。質料なしにこうした諸属性が存続しえないのは、属性なしには質料が存続しえないのと同じである。時間は、ひとが抽象的概念としての重量・空間実現・運動というものを質料と任意に結びつけ切り離すことにより、最終的に克服される。」(M ; S. 343.)

一見すると時間・空間を克服可能な概念とみているようである。しかし、モレスコットのつぎの記述をみれば、彼がそもそも意図していたものは、人間が世界に押しつける主観的秩序形式としての時間と空間を物質的諸属性としての時間・空間から切り離すところにあることが理解されよう。「空間・時間はたんに感性に関係するだけではないし、たんなる直観でもない。空間・時間は概念である。だが、それは並存性と継起性の感覺的知覚なしには決して考えられない概念である。もちろん、空間的变化の知覚は時間的区分の直観に先行しなければならない。ひとが砂時計での砂の運動と振子の振動をかぞえてはじめて、時間を空間的变化を通じて計測する手段を発見したことになる。反対に、2つの場のあいだの距離を時間によって、つまりつねに時計の針や日陰や砂の運動を感覺的に知覚することによって測った。空間・時間の概念にたどりつくには、こうしたすべての感覺的知覚を必要とする。」(M ; S. 42~5.)

無限性をもった質料が「時間と空間の限定から独立している」(B ; S. 47.)というときも、その主観性と客観性の峻別はきわめて不明瞭であるとはいえ、ここでいわれる時間と空間は人間が世界に押しつける主観的な秩序形式としてのそれであり、そうしたものから独立して質料が無限性を主張していることを述べようとしているところに、この記述の眼目があったように思われる。

6. 旧来の物質観と「科学的」物質観

「質料ないし物質を粗野でうしろめたく、不活性的で、精神に敵対ないし対立するもの」(B ; S. 49.) とみなす従来の物質観は、世界の墮落を目前にして、来世に想いをはせる時潮に特徴的なものとはいえ、「同時に、物質はそれ固有の運動をもたず、ただ運動する悟性(ヌース)に依存するとする支配的なアリストテレス哲学によって支えられていた」(同上)。このように、自らの物質観に敵対するものとして、アリストテレス哲学を指定するのは、ピュヒナーのみならずモレスコットにも同様である(M ; S. 25, S. 341.)。そして、運動しない質料を運動する悟性に対立させてとらえるこの物質観から、キリスト教は地上を浮世、自然を来世または神の国とみなし、前者とそこに属する肉体を軽蔑し、後者とそこに属する精神を賛美するという自己の自然観を導きだした。こうした物質観は、ローマ時代やさらに中世を経て、現代においてもなお、神学者や神秘主義者、観念論者によって引きつがれているとする。

このような旧来の物質観を現代の自然科学的物質観によって置き換えるには、物質と精神の二元論、そして前者の軽蔑と後者の賛美という敵対的・対立的把握を止め、物質による精神の包摂、二元論の止揚による一元論をもってする置き換えがおこなわれねばならないことになる(B ; S. 51.)。そこで、L・フォイエルバッハの言葉「自己欺瞞の虚偽は現代の根源的な悪徳である」を支えにして、ピュヒナーは物質から精神を導きだす。「問題の唯一の解答はつぎの点にある。つまり、質料ないし物質に内在するものが物理的のみならず、精神的な諸力でもあること、および後者はそのための必要条件が見いだせるところならどこでも、あるいは脳ないし神経系統において一定の様式で運動する物質が別の場合では引力および斥力という現象を呈するのと全く同様に、感覚および思考という現象を呈するところならどこでも現われるものであること——これである。」(B ; S. 54~5.)

ピュヒナーは「思考は質料の運動である」(M ; S. 439.)¹⁾とする立場を堅持しつつ、つぎのように述べる。「思惟とは普遍的な自然運動の特殊的形態とみなされうるし、またみなされなければならない。それが中枢神経の実体にとっ

て特徴的なことであるのは、括約運動が筋肉の実体にとって、または光の運動が宇宙エーテルの実体にとって、または磁性の現象が磁石にとってそうであるのと同様である。」(B ; S. 253.) こうした観点から、すでにK・フォークトはつぎのように主張している：「思考が脳髄にたいしてもつ関係は、胆汁が肝臓にたいしてもつ、あるいは尿が腎臓にたいしてもつ関係に相等しい」。フォークトのこうした主張は、カバニス (1757~1808) のそれ：「脳髄が思考のためにあるのは、あたかも胃が消化のために、ないしは肝臓が胆汁を血液から分離するためにあるのと同じである」——に類似しているとはいえ、こうした対比で思考と脳髄をとらえることに、ビュヒナーとモレスコットは反対する。

「尿や胆汁は具体的で計量可能で目でみることのできる質料であり、そのうえ肉体が自己から排泄する排泄物ないし廃物であるのにたいし、思考ないし思想は、分泌物でもなければ廃物でもない。それは脳髄において一定の様式で組み合わせられた質料ないし質料化合物の活動ないし働きなのである。」(B ; S. 252~3.)。また、モレスコットもつぎのようにいう。「思考は、熱や音がそうでないように、液体ではない。思考は運動であり、脳質料の分解である。思考活動が脳髄の必然的にして不可分の属性であるのは、あたかも、あらゆる場合に力が質料にとって内在的な、切り離しえないメルクマルとして固有のものたるのと同じことである。無傷の脳が思考しないということがありえないのは、思考がその担い手として、脳髄いがいの他の質料に関係しえないのと同様である。」(M ; S. 440.) このように、カバニス、フォークトにたいするモレスコット、ビュヒナーの論駁は、後者が明確に思考を運動ととらえ、しかも力の発現を質料(脳質料)の変化であると理解したいことによって、質料と力の明瞭な概念的区分をおこないえなかった前者に優ることを明らかにした。

このように思考が一定の物質的運動と不可分に結びついていることから、さらに進んでビュヒナーは思考を「力の循環」の一環であると把握する。「ともあれ、力の不滅性ないし保存にかんする偉大で例外をもたない法則をちょっとでも想起してみれば、つぎのことは疑いもなく明瞭である。つまり、思考ないし肉体活動一般は、かの偉大で普遍的で統一的な自然運動の一形態ないし

一個別現象様式にすぎざるをえないこと、またそれは、力の永遠の循環を支え、あるときは機械的、あるときは電氣的、あるときは精神的、等々の力として、われわれに知られたものであること——これである。」(B ; S. 256.) たとえば、「われわれの肉体内で不断に生起する、なおまた、われわれによって摂取された養分により維持される質料変換 (Stoffwechsel) が、木を割くひとや散歩をするひとにその筋肉が行使する力を供給するか、それとも学者・思想家・詩人に脳髄で思考を創造する力を供給するかは、事態にまったくなんの変更もない。形態ないし作用のみが、求められた器官の多様性に応じて多様であるにすぎない」(B ; S. 256.)

「思考は質料の運動である」(モレスコット) のだから、「質料とともに思考も消滅する」(B ; S. 258.) のである。

もちろん、思考は質料から無媒介に成立するわけではない。たとえば、モレスコットが「思考は質料の運動である」というとき、その背後には、つぎのような感覚論的認識論が潜んでいる。「判断、概念、推論、これが思考の総体をなす。推論は概念から生じ、概念は判断から、判断は感覚的観察から生ずる。だが、感覚的観察とは、質料的運動がわれわれの神経に与える印象——それは脳髄にまで伝達される——を把握することである。」(M ; S. 439.)

ともあれ、精神は物質の歴史的発展の産物として理解されている。「隕石の形態で物質は地上に降下する。筋肉の形態でそれは括約する。活動する神経物質の形態でそれは感覚および思考する能力を獲得する。つまり、自然諸力が得た、もっとも困難で錯綜し最終的勝利たるような物質から、精神的なるものを獲得し、そして長期にわたる段階を追って、人間の程度まで高まる、何千何百という歳月が造りだしたものを獲得する。」(B ; S. 55.)

7. 自然科学的唯物論者の物質観の根底にあるもの ——「循環」と「変換」、 個と全体——

すでに指摘したように、質料の不滅性ないし力の不滅性は、質料の循環ないし力の循環のなかではじめて意味をもちえ、また互いに相関概念として相対し

ている (B ; S. 30.)。

こうした「質料および力の永遠の循環」(der ewige Kreislauf der Stoff und Krafte) の連鎖のなかに個々の物質的運動は位置づけられるとすれば、まさに質料変換なる概念こそ、こうした連鎖のなかの不可欠の一環 (とはいえ質料の側からの一環にすぎないことは、その十全な把握のためには力の変換なる概念が必要だからである) であるといえよう。「それ自体変化しない微小な質料部分が行なうこうした永遠で不断の変換および循環を識者は質料変換と名づけている。しかも、科学はそのための例証を無数に提供している。」(B ; S. 18.) 循環の教えるものが「始めもなければ終りもないこと」ならば、循環の部分概念である変換が教えるものも同様につきのことである。「十分認められるのは、転変ないし変態が……目的も結末もないということである。」(同上) こうした例として、ビュヒナーはワーテルローで倒れた兵士の骨が土に還り、肥料となって後の食料に育ってゆく場合を掲げている。モレスコットも同様に述べている。「人間の排泄したものが植物を扶養する。[植物は空気を転じて構成要素に固定化し、もって動物を扶養する。肉食動物は草食動物によって生活するが、自分自身、死の餌食となって、植物界に芽生える新たな生命を広げてゆく。こうした質料の変換にひとは質料変換の名を与えている。この言葉を語るとき、確かにある種の畏敬の念を禁じえない。というのは、商業が交易の精髓であるように、永遠の質料循環こそ世界の精髓であるからである。』(M ; S. 40~1.) また、「この点に循環がもつ自然の驚異がある。……こうした輪廻は質料循環の直接の結果であろう。驚異は形態変換を通じての質料の永遠性に、形態から形態への質料の変換に、生命の根源としての質料変換にある」(M ; S. 86.)。

こうした「循環」と「変換」の関係は、さしあたり全体認識と部分認識のそれに比べられる。「質料と力の永遠の循環にあっては、ないものも死滅しない。だが、このことは総体、全体についてのみいえるのであって、個々のものは発生と没落のうちに不断の変換をとげているのである。」(B ; S. 344.)

物質観のうちに潜むこの全体認識と部分認識は人間観においても貫ぬかれ

る。「もうひとつ忘れてはならないのは、われわれ自身、個人および個体としては、全体の微々たる部分にすぎないし、こうした全体のなかに遅かれ早かれ再び解消されなければならないということである。自然ないし総体としての質料は、すべてを自己のうちから生みだし、すべてを再び自己のうちに取り込む、現存するものすべての母体である。」(B ; S. 52.) だから、たとえ個人が死滅しても、それは全体の生成のための死であり、全体の循環のなかでのこうした個人の生成・発展・消滅は「力の循環」に喩えられる。「不滅性を望む者はそれを自分自身ないし自己の貧しき人格——それは実に、存在という広大な大洋のなかの小波のひとつに等しい——に求めず、個としての自己が全体の生成にとって果たす貢献に求めなければならない。こうした貢献がどれほど大きく、あるいはどれほど小さくとも、その者は全体の生活のなかにもはや消失してしまうものではなく、全体の永遠性のなかで共鳴し、影響を残すのであり、あたかも力の永遠の循環にあっては、いささかの運動も失われることがなく、犯すべからざる因果法則が損なわれることがないのと同じである。」(B ; S. 351~2.)

個人の生存の目的は生存そのものであり、全体の循環に参加していることでその使命を果たしている。「全体の存在と同様、個の存在の目的も、存在そのものいがいではありえない。そして、現存するどのような物ないし生命も、その個々の領域の内部で不断の循環運動をおこなう全体ないし全宇宙の永遠の生命に参加することで十分その使命を果たしている。」(B ; S. 202~3.)

ビュヒナーの循環論は人間観を離れ、さらに敷衍される。「もちろん、忘れてならないのは、わが地球とその居住者が消滅したからといって、はてしのない永遠の世界自体の命運が尽きたというわけではないこと、そして、わが種族が荒涼のうちに滅亡し去ってゆくそのときにさえ宇宙の何千という別の箇所では——そう信ずる正当な理由を有するのだが——諸物は、その状態を成熟させ、生きて、その肉体的・精神的組織においても基本的にわれわれに酷似し、われわれのように最終的には総体としても個人としても消滅するようその運命を定められた生物ないし被造物の新らたな種属としてその歩みを開始ないし前進を

続行するような点までたどりついているだろうということ——これである。それゆえ、わが地球がそのうえに存在するすべてのものとともに消滅するということは、宇宙全体にとっては地上でひとりの個人が死んでゆく以上の意味をもたないときえいえるだろう。」(B ; S. 202.)

かつてモレスコットが質料循環のうちに「輪廻」(Seelenwanderung)(M ; S. 86.)をみたように、ビュヒナーにあっても、循環論のうえに築かれた彼の上述の自然観、人生観、終末観は「涅槃」(Nirwana)の言葉のなかに集約される。

「自然の暴威の前になすすべをしらずたたずむが、自法法則の認識を進めてゆくにしたい、いわば自己の道徳的自己否定ないし涅槃の境地に達するものである人間は、ただ自ら見渡しうる世界循環(Weltkreislauf)の小部分をかたちづくる自らの種属が一定の限度内ではあれ完成へと向かって進んでおり、どんな個人も自己のたんなる存在を通じてそのため相応の貢献をなすという点にだけ自己の慰めを見いだしうる。」(B ; S. 202.)

ここでいわれる「涅槃の境地」も、またその限りでビュヒナーが随所でみせる仏教への共感も、循環を方法論とする唯物論的物質観のうえに直接うちたてられた世界観の当然の帰結ともいえよう。

(筆者の住所：東京都福生市福生1530—12—304)